

「文化」に関する一考察： 異文化コミュニケーション論の視点から

A Thought on the Concept of Culture: From the Perspective of Intercultural Communication

(1995年3月31日受理)

佐生 武彦

Takehiko Saiki

Key Word：文化、文明、異文化屈折、異文化コミュニケーション

はじめに

数年前にタイの首都バンコックを訪ねた時のこと。早朝に催されるという水上マーケットを見学するはずが、チャオプラヤ川の支流をボートで走った頃にはすでに昼前になっていた。チャオプラヤ川の本流がそうであった様に、この支流の水も、「泥水」という形容が適当な濁り様で、ちょうど日本の河川が大雨の後に見せる様相であった。川沿いには、建物の半分が川面に突き出した格好の貧粗な民家がいくつも並んでおり、殆どの民家には川に面して仕切りがなく、ボートからは家の内部が丸見えというあり様だった。昼食の支度であろうか、女性が腰まで川に浸かって「泥水」で米を研ぐ様子が見えたかと思うと、子供達が「泥水」を使って洗髪をする姿が目飛び込んできた。暫くして川の水が「泥水」から「汚水」の様に黒く濁ったものになってしまったことに気が付いたが、水質の変化にも関わらず、米を研ぎ、洗剤で髪や体を洗う人々の姿が目に入った。

これら一連の出来事に遭遇して、筆者はある種強烈な「衝撃」を受けたが、所謂「カルチャー・ショック」でないことを直感的に察した。理由は単純で、仮に、「泥水」や「汚水」で米を研ぎ、髪を洗う住民達の「習慣（かどうかは定かではないが）」をカルチャー、つまり「文化」として捉えてしまえば、そしてこの文脈で「文化の相対性」を云々するとなれば、この「泥水」や「汚水」にまつわる「習慣」は、筆者の文化的尺度では計り知ることの出来ない「価値」を有するものと見做す必要が生じるからである。しかしながら、筆者には、この「習慣」が住民にとってでさえ「価値」のある代物とはどうしても考えられないのである。

それでは、筆者が受けたショックは何に由来し、また、それを何と呼べばよいのだろうか。一つ

の言い方として、「文明の普及度における落差」から派生するショックというのが考えられる。言うまでもなく、ここでの「落差」によるショックは、筆者が経験してきた日本での生活との比較から生じたものである。本稿では、タイでのこの経験を基にして、「文化」とは何か、また「文明」とは何かを考察する。

I. 「文明」とは何か

作家の司馬遼太郎（1989）は、「文化」と「文明」の2つの概念を次の様に整理している。

文明は「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対して、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまり普遍的でない¹⁾。

上で定義した文明の一例として、司馬は交通信号を挙げ、「たとえば青信号で人や車は進み、赤信号で停止する。このとりきめは世界に及ぼしうるし、げんに及んでもいる」と付け加えている。また、文化に関しては、「婦人がふすまを開けるとき、両ひざをつき、両手であける」という日本の古風な慣習を引き合いに出して、「立って開けてもいいという合理主義は、ここでは成立しない」と述べている。

司馬の定義を考慮すれば、筆者がタイで受けたある種のショックは、「合理的なもの・機能的なもの」としての上下水道に代表されるインフラの不備を目の当たりに見た時の衝撃であり、明らかに「文明」との関連で考察する必要がある。なるほど、「たれもが参加できる普遍的なもの」という文明の属性も、次のことを考慮すれば納得のいくところではないだろうか。つまり、仮に当の住民に「泥水による炊事」と「浄水によるそれ」との間に自主的な選択が許されるとすれば、多くの住民が、年来の「習慣」に固執するよりは、後者の「浄水による炊事」を歓迎するであろうと推測されることである。たとえ文化背景を異にする場合であっても、便利さや快適さを求めるのが人間というものではなからうか。従って、筆者が遭遇した状況は、インフラの整備、換言すれば、「文明」の導入によって簡単に変化し得るものと考えられる。

ついでに付け加えておくと、「文化の相対性」という考え方に筆者は与みしない。一つの理由として、相対性を云々する際の「文化」の意味が少なからず曖昧なことが挙げられる。そして、この曖昧さは、これまで検討してきた「文化」と「文明」を識別する（少なくとも大まかに）ための基準が提示されていないところにある様に思われる。集団（または個人）の意思によって簡単に変化する可能性を有し、その上明らかに「不衛生」な「泥水」にまつわる「習慣」を、筆者は「文明が普

及していない状態」と考える。そうすることによって、自文化（文明）の尺度による優劣評価の対象と捉えることも可能となり、ここにおいては、「習慣」の改善を勧める余地すらも生ずることになる。例の「習慣」を「文化」として捉え、文化の相対性に倣って、それを尊重することで暗に住民の現状を肯定することは、筆者にはできない。無論、川をして神が宿る「聖域」と住民が見做すのであれば、話は別であるが。

普遍性が「文明」の属性であるとする考え方は、既に述べた。これを別の言葉に置き換えると、「文明」とは「特定の文化集団の枠を越えて他の文化集団にも共有され得るものやこと」と言うことができる。交通信号の他にも車やコンピューターなど多くの「もの」が考えられるが、司馬が言及している様に、信号に関する「とりきめ」などの抽象的な概念も当然「文明」の範中に含まれる。数学の定理や公理などは、抽象的なものの代表格であろう。その他「文明」に属するものとしては、サッカーなど各種のスポーツ、世界各国で愛好されている中華料理、そしてクラシックやジャズのような音楽が挙げられるであろうか。また、リンガフランカとしての英語を「文明」の一つに数えることができるかもしれない。

それではこれら「文明」に属するとされるものやことは、なぜ他の文化集団にも広く共有され得るのであろうか。「文明」として上に列挙した事柄がヨーロッパや中国などかつての帝国を出自としていることを考慮すれば、これらものやことの普及が強大な政治力、経済力、及び軍事力の影響下にあることは言うまでもなく、むしろ国力が最大の理由であると言っても過言ではない。しかしながら、「文明」に数えられることやものに概ね共通していることとして、言葉やシンボルを通しての「説明の可能性²⁾」或るいは「学習の可能性」が挙げられることも確かである³⁾。「合理的なもの」と司馬が呼ぶ「文明」のもう一つの属性である。この様な属性を備えたものだけが特定の文化を越えて異文化に共有されることになるのだろう。

例えば、クラシック音楽の世界的な普及（勿論、インドなど伝統音楽に固執する文化もあるが）は、この音楽に特有の譜記法に負うところが大きいように思われる。論理的で分析的な譜記法によって、伝達の際の説明や学習が容易になるというわけだ。（もっとも楽譜を簡単に読みこなせる様に成るまでには相当な労力が必要ではあろうが。）翻って、尺八の様な音楽の場合はどうだろうか。無論、クラシックに比べてこの音楽の普及度が低い理由には多くの要因が考えられるだろうが、ここで言う「文明」の属性、つまり、言葉やシンボルによる「説明の可能性」や「学習の可能性」が極めて低いことも一つの重要な要因ではないだろうか。尺八の場合、簡単な楽譜のようなものが存在しない訳ではないが、「尺八は音の禅」という表現がある様に、むしろ「知的作用を隔絶した世界⁴⁾」と言われ、学習に際しては直感による体得が要請される。その上、「首振り三年」という表現が示すように、習得には長い年月を要する。

文明が普遍的なものであるという属性が、言葉やシンボルによる説明及び学習の可能性に支えら

れていることが分かった。それでは後者を支えているものがあるのだろうか。山崎（1987）は、「人間の意識のめざめの程度が高ければ高いほど、その産物は人口的であり、その行動は説明可能であり、したがって普遍的に理解可能だ……⁵⁾」と述べ、「文明」と「文化」の違いが人間の意識化の段階に即応するとしている⁶⁾。意識化の程度が極限まで高まったものの一例として、「行動の方法からいやくいひがたい要素を排除し、これを可能な限り合理的に組織して、工程書やマニュアルになじむものにする⁷⁾」をその特徴とする近代技術がある。

Ⅱ. 「文化」とは何か

上の考察から、「文明」を、(1)人間の意識の高い状態で生み出され、従って(2)「説明の可能性」が高く、またその結果として、(3)他の文化への移植の可能性が高いものやことと定義することができそうである。そして、「文化」の定義は、「文明」に備わる各要素のベクトルを逆にすることによって入手することができるのではないかと筆者は考える（表1参照）。ここで一言付け加える必要のあるのが、「文化」と「文明」を画然と区別するような一線はどこにも存在せず、むしろ任意のものやことは、ある種の連続体の上に位置するということである。従って、それらのものやことは「文化的」または「文明的」の用語を用いて表現する方が妥当かと思われる。以下では「文化的」なものやことについて、コミュニケーションとの関連で考察する。

動作主の意識が低いという意味で、極めて「文化的」な行為と考えられるものがある。多くの非言語コミュニケーションなどはこの範中に属するであろうか。何気無く「腕を組む」行為など、なるほど「何故そうするのか」と尋ねられても、うまく説明することが出来ない場合が多い。言語コミュニケーションにおいても、「言葉にまかせて」喋ることは、意識的に「言葉を選ぶ」という行為に比べると、はるかに「文化的」であると言える。

それでは「文化的なもの」の属性と考えられる「他文化への移植可能性の低さ」は、上のような「文化的」コミュニケーションにあっては、いかなる意味を持つのであろうか。例えば、ニュースの言葉等は、それが確実な情報伝達の意図の下に、語彙や表現等の意識的な選択の結果として「作られた」ものであるために、送り手の意図は概してストレートに伝えられる場合が多い。しかしながら、意識の低いところで発せられる言語的または非言語的メッセージの場合、受け手がメッセージに与える意味は多義的になり、真意が伝わりにくいということが起こる。このことから「文化的」コミュニケーションにおける「移植可能性の低さ」とは、メッセージの内容が「正確に理解されて伝わる可能性の低さ」と言い換えることができる。そして、メッセージが「文化的」であればあるほど、解釈の幅が広がるために、受け手の誤解を招くおそれが高くなると言える。このことは異文化コミュニケーションにおいて特に顕著となるであろう。

Ⅲ. 「屈折度」の違いで見る「文化的」と「文明的」

「異文化屈折⁸⁾」という理論がある。これは「ある文化のものやことが他の文化に入る際には、常になんらかの屈折が生じる」ことを指している。物や制度の場合であれば「誤用」が見られ、言語や非言語のメッセージであれば「誤解」が生じるわけである。この考え方を上の議論に応用すると、「文化的」なものほど屈折の度合いが高く、逆に「文明的」なものほど屈折の度合いが低いということが判る。両者のこの特性に加えて、これまでの議論を表にすると下の様になる。

表1：「文化的」と「文明的」の相違

	文化的	文明的
(1) 意識化の度合い	低い	高い
(2) 説明の可能性	低い	高い
(3) 移植の可能性	低い	高い
(4) 屈折の度合い	高い	低い

「屈折の度合い」に関して、幾つか例を挙げておくと、文明的なものの顕著な例として前述した数学の公理や定理の場合、ゼロの屈折率を伴って、人類に普遍的に共有されている。有名な日本人の「照れ笑い」などは、外国人によって屈折して解釈されることを考えれば、「文化的」と理解しても差し支えないと思われる。面白い例を一つ

筆者のアメリカでの経験から記しておく、空手という日本の武道は「文化的」な側面と「文明的」なそれを兼ね備えているようである。空手の型（文明的なもの）については見事なほど忠実に伝達されていた（屈折の度合いは極めて低い）ことには感心したのだが、アメリカ人指導員のチューイング・ガムを噛みながらの稽古姿には閉口した経験がある。武道の精神（文化的なもの）とやらは、大幅に屈折して移植されたというよりも、全く伝わっていない様子であった。蛇足ながら付け加えておくと、民主主義や人権等の普遍的思想と称されるものがあるが、各国が自国の事情に合わせて、幾分か屈折した格好で受け入れているところを見れば、ここで言う「文明的」という意味合いでは、それほど「普遍的」なものではないのかもしれない。

Ⅳ. 「文明化」する「文化」

「ある文化集団の枠を越えて他の文化集団にも共有されるものやこと」を「文明」と捉える考え方は、ある歴史的時点では一地域の特殊な「文化」であったものが、「文明化」したことを意味する。この考え方は、次の様な思考を可能にするであろう。(1)特殊な「文化」が普遍的な「文明」に成る潜在的可能性を備えていること。(2)現時点において「文明化」しつつある「文化」があること。(3)特定の文化集団にとっては伝統文化と捉えられるものやことが、同時に「文明」として世界的に共有されること。(2)について卑近な例を挙げれば、ハードとしてはもちろんのこと、娯楽（余暇の過ごし方）としてのカラオケも確実に「文明化」の道を歩んでいる様に思われる。(3)の例とし

て、柔道は言うまでもなく日本の伝統文化の一つであるが、judo はすでに文明の領域にあると言っても過言ではない。同様に、日本人が好んで食する豆腐も、今では各国で愛好される「文明食」になりつつある。無論、柔道においては国際ルールの導入による、豆腐については異なる加工法や調理法による共有ということで、多少の「異文化屈折」を伴った上での「文明化」ではあるが。(3)の考え方は、フランスの日本研究家ルネ・ツフェールが、「世阿弥の能や光琳の絵は、ヨーロッパの同時代人の作品と同じ意味で古典的なのだ⁹⁾」と述べた際の見解に、一脈通じるところがある。つまり、世阿弥の能や光琳の絵は、日本の伝統文化であると同時に、世界的遺産としての「文明」なのである。

V. お わ り に

本稿では、筆者のタイでの経験を下にして、「文化」について「文明」との比較を通して考察した。意識化の低いところで生み出され、その為に言葉やシンボルを介しての説明が難しく、結果的に他の文化集団に共有される可能性が低いものやことを「文化」或るいは「文化的なもの」として捉えた。ここでの議論では、通常理解されている様に、「常に変化するプロセス」という文化の重要な属性が、あまり顧みられなかった点に少なからず悔いが残る。しかしながら、「常に変化するプロセス」と言っても、文化の全体が一様に恒常的であるというよりは、むしろ「変わりやすいもの」と「変わりにくいもの」との両者によって文化が構成されているとする見解が妥当であると思われる。だとすれば、前者がより「文明的」であり、後者がより「文化的」とする捉え方もあながち無理なことではなく、本稿で検討した「文化」に関する考察も、従来の「文化観」を補足するものとして有益であると筆者は考える。

最後に、「文化」の「文明化」について異文化コミュニケーションとの関連で一言しておけば、言語的及び非言語的メッセージを可能なかぎり意識化することによって、メッセージの「文明化」を図る営為は、異文化間の相互理解には特に要請されるであろう。自己のあらゆる行為、そして出来れば自己の癖に至るまで、「なぜ自分はそうするのか」と常に意識化し、言語化し、更に説明可能な状態にしておくことが、他者による屈折を最小限に抑えることを可能にするであろう。

註

- 1) 司馬遼太郎『アメリカ素描』新潮文庫、1989年、17頁
- 2) 山崎正和『文化開国への挑戦』中央公論社、1987年、49頁
- 3) 「説明の可能性」及び「学習の可能性」に加えて、両者の「不必要性」という属性も同時に掲

げておく必要があるだろう。なぜなら、文化の枠を越えて広く共有されるものの中には、例えば、スイッチ一つで普遍的に便利さや快適さを提供する所謂「文明の利器」と言われるのが多くあるからである。

- 4) 小倉朗『日本人の耳』岩波新書，1977年，9頁
- 5) 山崎，1987年，前掲書，P. 50
- 6) もっとも山崎は、「文化」と「文明」という従来からの2項対立的な理解を廃し，自然，文化，観念からなる3元構造を提唱しているが。
- 7) 山崎，1987年，前掲書，P. 54
- 8) 宇野善康他『国際摩擦のメカニズム—異文化屈折理論をめぐって—』サイエンス社，1982年。
- 9) 樋口陽一『自由と国家』岩波新書，1989年，201頁